

小松啓一郎著「複眼思考 - 忍び寄る国際経済危機。英国からの検証 - 」

ジェトロ(日本貿易振興機構) 2006年7月3日刊を読む

ワースト・ケース・スタディ

1. 「ワースト・ケース・スタディ」という言葉がある。

それは、これから直面し得る最悪の事態とはどんな状態かを見極めようとする試みとでも言えるだろうか。

2. 個人であれ、組織であれ、敢えて最悪の事態を想定し、そのような事態になってもなお乗り越えていけるようにするにはどうしたらいいかを考えて戦略を立てていくやり方がある。

そのためには、ワースト・ケース・スタディが必要になる。

3. 他方、どの世界にも「大変だ」人間がいるという。

べつに大変な事態でもないのに、やたらに「大変だ、大変だ」と騒ぎ立てる人のことだという。

それは、周囲の人々を不必要に戸惑わせ、冷静な行動を不可能にしてしまう迷惑な言動だとも言える。

4. 確かに、世の中が困難に直面し、悲観論の悪循環に陥っていてもなお、自らの発想を転換することで、その困難を逆手に取って成功へのチャンスにしてしまう人々がいる。

あの1929年の世界恐慌の最中でさえ、大成功している人々がいたという事実もある。

5. 「失われた10年」とまで呼ばれた日本経済の苦境の時期に英国に赴任していた筆者は、それでもなお日本経済を高く評価している英国の政府関係者や産業界の人々に毎日のように出会っていた。

そして、苦境下の日本市場にも果敢に進出し、成功している個人や企業を目の当たりにしてきた。

6. 翻って、重苦しい経済不振の時代を乗り越えて光を見出しつつある最近の日本社会では、久し振りに味わう解放感からか、過剰な先行き楽観論も台頭しつつある。

しかし、あの「9.11 テロ」以降、そのような経済ファンダメンタルズの改善とは無関係であるかのように様々な国際危機が深まりつつある。

そして、そのような国際危機はいつでも日本経済のファンダメンタルズを悪化させかねない。

7 .国際危機の深刻化と日本国内の楽観論の高まりのギャップを観察する海外の知日家の間では、「日本人＝ゆでガエル」論があると聞かされたことがある。

釜の中の水が少しずつゆで立っていくにもかかわらず、その中で泳いでいるカエルは、水温がいよいよゆで立つまで何も気づかないで悠然と泳ぎ続けているという。

国際危機の深まりを実感できない日本人の姿をゆで釜の中で泳ぐカエルになぞらえた「たとえ話」である。

不必要に危機感を煽るようなことは常に慎まなければならない。

8 .しかし「危機感を煽るな」と主張することで実際に存在する危機にまで目をつぶってしまっ
ては、かえって危機の渦中に飛び込んでしまうことになる。

「経済ファンダメンタルズ」という単眼的な視点からではなく、「政治・経済」という新たな複眼的視点から現実を見直すという発想の転換が是非とも必要な時代になっている。

9 .いずれにしても、「ワースト・ケース・スタディ」ならぬ「ベスト・ケース・スタディ」に陥ってしまうことだけは避けたいものである。

その「ベスト・ケース・スタディ」を「希望的観測」と言い換える人もいる。それを「とらぬ狸の皮算用」と言い換える人もいる。

10 .チャンスもリスクも実物大で見ることができるようになったとき、初めてバランスの取れた危機防止と成功への歩みが可能になるのではなかろうか。

[コメント]

ワースト・ケース・スタディが今日ほど、日本中、いや世界中に蔓延している時期はない。逆に、そんな時期だからこそ、小松氏の「複眼思考」が必要と私は考える。嘆いてばかりいても成長は始まらない。ピンチの中にもチャンスあり、ピンチをチャンスにすることが求められる時期と考える。それにしても冷静なものの見方は必要不可欠だ。

- 2009年2月5日林明夫記 -